

<書評論文>

社会システム理論における「包摂／排除」

Sina Farzin,⁽¹⁾

*Inklusion / Exklusion: Entwicklungen und Probleme einer
systemtheoretischen Unterscheidung*
(transcript Verlag, 2006)

鈴木良典

1 はじめに

N. ルーマンおよび彼の理論を受け継いだ社会システム理論家たちは、「包摂／排除」という差異をテーマの焦点や理論的関心に応じて様々に定義し、使用してきた。本書はそうした社会システム理論における「包摂／排除」の概念的多様性を統一的に観察し、批判的に考察することを目標としている。

著者であるS. ファルツィンがこの研究に向かった背景には、90年代以降、社会的不平等という社会学の古典的テーマにおいて、排除の概念を標題に掲げた研究が注目を集め始めたという事情がある⁽²⁾。そうした研究において対象となるのは、社会の「ノーマル」な機能にとって取るに足らないものとなっている、つまりコミュニケーション的に孤立している社会層である。それは従来の階層モデルや貧困モデルでは把握されない。なぜなら階層・貧困モデルにおいて採用されているヒエラルヒー的な分配構造モデルでは、そうした社会層を社会の中に位置づけることができないからである。著者が目指すのは、ルーマン理論的排除論をこのようなシステム理論外の排除論に接続させていくことであり、本書はそのためのいわば土台作りである。

ルーマンにおいて「包摂／排除」の差異は、心的システムと社会システムとの関係というテーマにおいて使用される。ルーマン理論においてこの区別は理論構築の様々なレベル

⁽¹⁾ ブレーメン社会科学大学院特別研究員。専攻は社会理論とシステム理論。

⁽²⁾ 著者自身が挙げているVolkmann (2002) を参照。

に導入され、また様々な経験的事象の説明にも使用されている。そうした概念的多様性を統一的に観察するために、著者はルーマン理論における「包摂／排除」の解釈を、理論的な水準の区別に沿って一般システム理論的解釈、全体社会理論（Gesellschaftstheorie）的解釈の二つに分類する⁽³⁾。

一般システム理論はシステムについての最も一般的かつ抽象的な理論であり、そこでは一般的な意味でのオートポイエティック・システムが語られる。オートポイエティック・システムとは、システムを成り立たしめる構成要素を、システムを成り立たしめている構成要素のネットワークによって生産するシステムである。ルーマンにおいてオートポイエティック・システムの特徴は「作動的な閉じ」であるとされるが、これはシステムの要素はシステムの作動においてのみ産出され、要素が環境から入力されたり環境へと出力されたりすることはあり得ない、ということの意味する。

ルーマンはこうした作動的に閉じたシステムとして、社会システムと心的システム（意識）を定義する。こうした心的システムと社会システムとの間の関係は、構造的カップリングによって仲介され成立する。作動的に閉鎖したシステム同士は、作動のレベルで重なり合うことはあり得ないので、システム間関係は構造レベルにおける互いの互いに対する刺激および被刺激能力の程度によって定まる。構造的カップリングの関係にあるシステムは、互いに互いに対する刺激を生み出し、その刺激を構造選択に利用し合う。

「包摂／排除」の区別は、以上のような基礎の下で、心的システムと社会システムの区別の厳密さを際立たせるために導入された。ここでの包摂概念は、心的システムが社会システムの構成のために自身の複雑性を提供することを意味する。これに対し排除概念は、包摂を実現するためにそれぞれのシステムのオートポイエシスを互いに区別することを指す。要するに、一般システム理論においては構造的カップリングにおけるシステム同士の関わり方の形式が、包摂と排除の概念ペアによって論述されているのである。

他方全体社会理論は、一般的なシステムではなく社会システム（soziales System）、その中でも相互作用システム、組織システムとは区別される全体社会（Gesellschaft）についての理論である。全体社会理論において包摂は、人間が人格（Person）として社会的に考慮されるチャンスを含み、排除はその反対、つまり人間が一定のコミュニケーションから排除されることを意味する。本書における著者の議論は、一般システム理論よりも全体社会理論に明らかに重点が置かれているので、本稿も後者について主に論じる。

⁽³⁾ 著者は実際には一般システム理論、全体社会理論、コミュニケーション理論の三つに分類している。しかし全体社会理論とコミュニケーション理論は同じ社会システムを取り扱う理論であるし、本稿の趣旨から見てもまとめて扱ったほうがよいと思われる。

本稿ではまず、全体社会理論の水準におけるルーマンの「包摂／排除」解釈を、著者のまとめに沿って見ていく。ついで著者自身の発展的解釈を示し、最後に本書を評価する。

2 ルーマン全体社会理論における「包摂／排除」

2.1 排除なしの包摂

ルーマンは1970年代半ばに包摂概念を全体社会理論へと導入した⁽⁴⁾。全体社会理論において包摂概念は、社会システムへの参加がどのような形式において可能となり、また保証されるのかを指示する。この概念規定は、パーソンズの包摂概念に直接つながるものである。

包摂概念におけるルーマンとパーソンズとの差異は、ルーマンが社会システムと心的システムをそれぞれ閉鎖的なシステムとして把握している点にある。よって包摂は、「社会システムが人格という形式によって心理システムを把握すること」として定義される。また、そうした閉鎖的なシステム同士の関係は、構造的カップリング、すなわち互いに互いのその時々構造に影響を与えるという関係になる。したがってルーマン社会理論において包摂は、社会構造の変化が心的システムとの関係にいかなる影響を与えるのか、またそうした変化がどのように社会システムにおいて観察可能なものとなるかという問題との関連において導入される。

社会構造における重要な変化は、ルーマンにおいては社会の第一次的分化形態の変化として把握されている。第一次的分化形態とは部分システムの分化のあり方である。そうした第一次的分化形態は、歴史的に環節分化から、成層分化、そして機能分化へと変化してきた。ルーマンは近代社会を機能的に分化した社会として捉える。機能分化とは、法、政治、芸術など、全体社会に対する機能的関連に即して部分システムが分化することを指す。そうして分化した機能システムは、作動的に閉じたシステムであり、所轄機能に関して排他的かつ社会普遍的な要求をする。例えば、合法か不法かという図式に関わることは全て法システムに関わる。また、機能システム間には序列は存在しない。なぜなら、そうした機能のうちのどれが重要かはその時々状況によって異なるからである。機能分化においては、部分システム間の関係を規定する審級が存在しないまま、各機能システムが自身の作動論理に従ってリアリティを産出する。その結果、全体社会は多中心的なものとなる。

⁽⁴⁾ 主なものとしてLuhmann ([1975] 2005a: 187-211) を参照。

近代において社会がこうした多中心的なものとなると、社会システムと心的システムとの関係、つまり包摂のあり方も変化する。全体社会が多中心的なものであるため、包摂のあり方を規制する中心的な審級が消滅し、近代において包摂の規制は各機能システムに委ねられることになる。機能システムへの包摂は、個々の機能システムによって機能充足という観点から調節される。ここで重要なことは、機能分化において、ある特定の部分システムに個人が完全に包摂されることは不可能となるということである。例えば法律のコミュニケーションだけに参加する人が存在しうかどうかを考えてみればよい。したがって機能システムにおける包摂は、同じ人間を他の機能システムも包摂するということを前提として、部分的かつ一時的なものとなる。

このような機能分化における包摂の制度を全体社会の次元において再定式化すると、「機能分化した社会にあっては、社会の成員全てが全ての機能システムにアクセスすることが可能である」ということになる。

ここまでは専ら社会構造のレベルにおける変化が述べられていたが、構造レベルの変化はゼマンティック上の転換と対応している。機能分化への転換によって、構造レベルでは全包摂のテーゼによって表現されるような包摂の制度が生じている。こうした包摂の秩序のためにゼマンティックレベルでは、「包摂の論理」が自由や平等といった概念によって理想化される。しかし何よりも重要なのは、人格という形式における個人の評価の変化である。近代社会は一人の個人が様々なシステムに参加するチャンスを提供し、個人はそれを達成できる能力をもったものとして把握されているのである。

要するに70-80年代のルーマンは、包摂概念を「排除なしの包摂」として全体社会理論に導入している。もちろんこの解釈においても、機能的に分化した社会がチャンスと資源の相当に不平等な分配を生み出し、さらにそれを許容しているということは指摘されていた。しかし、そのような作用はゼマンティックからして二つの制約に服する。第一に、それは一時的なものに過ぎず、すぐに変化しうる。第二に、そうした作用は個々の機能システムに限って見られるものであり、各機能システム間の相互依存は切断されている。ここでは不平等は「包摂の論理」と矛盾するものではなく、「包摂の論理」を貫徹させることによって未来において解決される「残余問題」とされているのである。このことは、ここで述べられている排除が、結局のところシステム、つまり包摂の側において観察されたものであることを示している。

2.2 全面的排除

ルーマンは80年代まで、以上のような「排除のない包摂」というコンセプトを提示していたが、90年代後半になって排除概念の彫琢へと向かった⁽⁵⁾。著者によればこのことの背景には、ルーマンの近代社会への進歩的包摂に対する根本的な疑念があった。ルーマンがなぜこのような疑念を抱いたかといえ、それはファヴェーラというブラジルの大都市の貧民街に滞在したことをきっかけとして、上記の「包摂の論理」が非蓋然的であること、つまり複数の機能システムからの持続的かつ固定された排除が蓋然的であることを知ったからだという。

このような不平等現象が生じるメカニズムを説明するために、ルーマンはまず包摂と排除を明確に「包摂／排除」という対概念として使用するようになる。包摂とは個々の人格が社会的に考慮されるチャンスのことを指し、排除は個々の人格が社会的に考慮されないこと、コミュニケーションにおいて重要なものとはみなされないことを指す。「包摂／排除」は対概念として互いが互いに対する条件をなしており、排除がなければ包摂はなく、包摂がなければ排除はない。

既に述べたように機能分化した社会においては、包摂の規制は各機能システムに委ねられ、一方の機能システムへの包摂が他方の機能システムへの包摂に影響を与えることはない。しかしそれに随伴する排除においては、すべての機能システム間の横断的な結びつきが生じてしまっている。なぜなら、機能分化した社会には排除を制御する中心審級がないので、社会からの制御された排除が不可能になるからである。そしてこのような排除の結びつきの結果、機能分化の論理から生じたにもかかわらず、機能システムのコミュニケーションから大幅に閉め出されているひとつの閉鎖的なコミュニケーション領域が形成される。

著者によれば、ルーマンは社会的不平等を、こうした「全面的排除」(totale Exklusion)、つまり機能システムのコミュニケーションからの結合的排除というコンセプトにおいて説明しようとしている。

2.3 ルーマンの全体社会理論的排除論の問題点

以上のようなルーマンの排除論に対して、著者は否定的評価を下している。その理由は

⁽⁵⁾ 主なものとしてLuhmann ([1995] 2005b : 226-251)、Luhmann (1997 : 618-633) を参照。

二つある。第一に、「全面的排除」は機能システムのコミュニケーションからの完全な排除を意味しているが、これを社会的な不平等と同一視するのは極端すぎて無理があるということが挙げられる。というのも、スラム街の住人でさえそのような状況にあるとはいえないからだ。彼らも例えば政治システムにおいては政策の対象として位置づけられている。つまり、ルーマンは「全面的排除」という例外的な現象を社会的な不平等という「ありふれた」現象と取り違えてしまっているのだ。第二に、こうした排除は機能システムの合理的な作動から生じているにもかかわらず、「包摂の論理」、つまり社会システムの観察と矛盾してしまうということがある。それによって、問題の解決を未来へと先延ばしする可能性は失われる。この結果、この排除概念を用いた社会診断は絶望的なものとなるが、著者は診断が絶望的になるのはルーマンが包摂をあまりに単純に理解しているからではないかと考えている。ルーマンは包摂をいわば摩擦のない形式として評価している。しかしスラム街住人の例を見ても明らかなように、包摂は社会的に成功したと評価されるような包摂のみを意味しているのではないのである。したがって、社会システム理論的排除論が社会的な不平等の研究に貢献するためには、包摂概念を多様な形式を含むものとして把握し直さなければならない。

3 システム理論的排除論の発展可能性

著者は、ルーマンの排除論が社会的な不平等の分析として失敗したのは、包摂に関わる二つの要因を考慮に入れていなかったからだとして述べている。その要因とは、第一に組織のような機能システムへの包摂を媒介する存在があること。第二にローカルな条件によって機能分化が貫徹されない場合があるということ、以上の二つである。著者は、これらの要因がいかにして社会的な不平等を生み出しているのかを記述している。

3.1 組織

組織は「成員／非成員」という区別によって包摂と排除を行い、内的にはヒエラルヒー的な構造を構成することによって不平等を生み出す。そして以上のような二つの構造でもって、組織は人格を社会空間内に配置する。これは全体社会的な視点から見れば、機能システムと個人の生活状況とを媒介する機能を果たしている。特に重要なのは、組織が個人に対して集合的に裏付けられたアイデンティティ保証を提供していることである。これによって、包摂と個人の自己認識との齟齬、つまり社会的な不平等の増大が予防される。しか

し、こうした組織の機能は、全ての機能システムは政治的に組織化、介入可能であるという前機能分化的な制御幻想に基づいている。そのため機能分化の進展による機能システムの自律化に伴ってそうした制御幻想は崩壊し、組織の包摂媒介機能は弱体化する。こうした過程は、最も近代的な地域においても社会的な不平等が存在しているという事実と符合している。

3.2 世界社会と「包摂／排除」

機能分化という近代的分化形態においては、機能的コミュニケーションは基本的に地域的な条件によって遮断されない。なぜなら、機能システムは地域的基準に基づいてではなく、機能に関連付けられてのみ分出しうるからである。よって全体社会は今日、世界規模に広がったコミュニケーションの包括的文脈、つまり世界社会として把握される。

こうした世界社会に外部は存在しない。なぜなら、世界社会からの排除は端的に非現象であり、出現し観察された時点で世界社会の内部のものになってしまうからである。したがって、もし世界社会の内部で排除がありそれが観察されうるとすれば、それは機能分化という分化形態自体が、ローカルな条件によって第一次的分化形態という地位を失っているということを意味する。著者はそのような条件として環節分化や階層分化といった残余構造や、階級形成といった機能システムとは相容れない分化形態を挙げている。

4 おわりに

本書は、ルーマン理論における「包摂／排除」の概念的多様性を、概念史的な方法ではなく理論内在的に整理したこと、また、システム理論を社会的な不平等というシステム理論外においても重要なテーマに接続させる道筋を具体的に示したこと、以上の二点において優れた仕事であるといえる。

しかし、著者のルーマン批判に関しては、ルーマンのねらいを捉え損なっているのではないかという疑問が残る。というのも、著者が批判する「全面的排除」というコンセプトを、ルーマンが社会的な不平等の経験的記述のために導入したかは疑問だからである。ルーマンは、著者が「全面的排除」と呼ぶコンセプトを導入した「包摂と排除」において、次のように述べている。

インクルージョンとエクスクルージョンの差異は、経験に照らしてみれば全ての人格が一方ま

たは他方に振り分けられるほど明白なものではない。[・・・]ファヴェーラにおいても、新生児については疫病の流行を防ぐための予防接種が励行される。しかしそれらは、適切な概念装置を手にして初めて取り組むことができる経験的研究の、細かいテーマなのだ。本稿で試みたような概観にとって何よりも重要なのは、社会分化の理論を適切な概念装置によって豊かにすること、そして、成層的分化とか機能的分化とかいう支配的な類型論の観点から全体社会というものを十分に記述できるという期待を棄てることである。インクルージョンという形式及び随伴して生じるエクスクルージョンは、社会におけるシステム形成の形式と密接な関係をもつものではあるが、その不足を補うために取り上げるべき問題なのである。(Luhmann [1995] 2005b=2007: 238-239) ⁽⁶⁾

この引用からも分かるように、ルーマンは「全面的排除」というコンセプトを、機能分化という社会的類型論の補足理論として位置づけている。したがって、それ自体が経験的に検証できる仮説であるとは言えないだろう。

それではより具体的に、ルーマンが「全面的排除」を導入したねらいは何なのか。それは第一に、多中心的な社会における統合という機能分化論が必然的にもたらす問題に答えるためである。ルーマンは「全面的排除」のコンセプトからこの問題に対して、近代社会は排除領域において否定的に、コンセンサスなしに統合されているという結論を導いている。そして第二に、上(2.3)でも述べたように、社会システムの作動が「包摂の論理」、つまり社会システムの観察と矛盾するという事態を強調するためである。著者はそのような矛盾を理論の方の欠陥だとみなしていたが、ルーマンは対象の側に実際に生じている事態だと見る。そうすることによって、社会の側で普遍的だとされている包摂論理を批判しているのである。また、このことは上の引用で述べられているように、社会理論の自己制限を導く。なぜなら、社会理論も全体社会の下位システムである学問システムの観察であり、「全面的排除」で述べられているような観察と作動の矛盾を抱え込んでいるものと考えなければならないからである。

ここから逆に、システム理論外の排除論に対し、ルーマン理論から批判を行うことが可能となる。つまり、そうした議論はあたかも「客観的」に排除が存在するかのよう語っているが、そこで述べられている排除はある特定の社会システムからの観察の結果であり、しかもその観察は作動との矛盾から生じる「全面的排除」を捉えきれない、という批判である。システム理論的排除論がシステム理論外の排除論に貢献できるとすれば、このような批判を通してではないだろうか。

⁽⁶⁾ 訳者による補足は省略した。

参考文献

- 小松丈晃, 2003, 「リスク論のルーマン」 勁草書房.
- Luhmann, N., [1975] 2005a, "Evolution und Geschichte," *Soziologische Aufklärung 2: Aufsätze zur Theorie der Gesellschaft*. 5. Aufl., Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaft, 187-211.
- , [1995] 2005b, "Inklusion und Exklusion," *Soziologische Aufklärung 6: Die Soziologie und der Mensch*, 2. Aufl., Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaft, 226-251. (= 2007、村上淳一編訳「ポストヒューマンの人間論」 東京大学出版会: 203-250.)
- , 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- 長岡克行, 2006, 「ルーマン／社会の理論の革命」 勁草書房.
- Volkman, U., 2002, "Soziale Ungleichheit. Die »Wieder-Entdeckung« gesellschaftlicher Ungerechtigkeit," Uwe Schimank (Hg.), *Soziologische Gegenwartsdiagnosen 2. Vergleichende Sekundäranalysen.*, Opladen: Leske + Budrich, 227-256.

(すずき よしのり・修士課程)